

家父長制を解体する「家なる天使」たち ——脱個人化・再個人化・女性——

副 島 美由紀

I. 序

最近のドイツ語圏の文学に占める女性作家の地位は高まる一方で、アメリカのフェミニズム批評家に倣ってそれをサブ・カルチャーと呼ぶのはもはや滑稽な感すらある。現にクリスタ・ヴォルフは近年の「男性作家の不足」を嘆いているほどだ。⁽¹⁾ 批評の分野では、1960年代の終わりごろから国際的な女性運動の一環として発展してきたフェミニズム批評が、男性中心的に作られてきた文学的伝統に対する「読み直し」⁽²⁾、「修正＝見直し」⁽³⁾を提唱し、文学研究の前提を徐々に変化させてきた。現にジョナサン・カラーは『デコンストラクション』の中で、「文学の概念そのものに衝撃を与え」⁽⁴⁾、「おそらく今日の批評の中で最も強い革新力をもつもののひとつ」⁽⁵⁾としてフェミニズム批評を紹介しているし、テリー・イーグルトンも『文学とは何か』の中で、男性と女性の差異は「ポスト構造主義が崩壊しようと図った二項対立のなかで、おそらくもっとも手ごわい相手」⁽⁶⁾であると認めている。また一方では、エレイン・ショーウォーターやデイル・スペンダーといった英語圏の研究者等による文学史の「読み直し」によって、「先母たち」^{フォア・マザーズ}の再評価も行われている。スペンダーによれば、今日ほど女性作家が活躍する時代が文学史上かつてなかったかという決してそうではない。18世紀の小説家の大半はむしろ女性作家であり、「小説」というジャンルは数名の男性作家によって創始されたのではなく、百人余りの女性作家達が集団で確立したものであるという⁽⁷⁾。また、当時の女性作家達は質、量ともに男性作家を圧倒していたらしく、男性作家が出版社への売り込みや読者の人気取りのために、「女性の文体と人物を装う」⁽⁸⁾ことがあったことなども指摘されている。ところが当時

の女性作家の作品は、男性の作品のように特権化されなかった。つまり、女性作家の伝統は男性中心的な文学史の規範によって故意に無視され、排除されてきたのである。スペンダーの言を借りれば、「女の歴史は、沈黙から有音へ、そして再び沈黙へと揺れる振り子⁽⁹⁾」のように、つねに非連続性のなかに置かれてきた⁽¹⁰⁾。よって、今日が女性作家にとって有音の時代ではあっても、振り子の揺り戻しが再び来ないという保証はどこにもない。今後恣意的な忘却を免れるためには、文学研究の領域において積極的に今日の女性作家達をとりあげ、学術研究の対象として検討していくことが必要である。本論は、現代オーストリア文学を代表する二人の女性作家をとりあげ、その作品がファルス＝ロゴス中心主義の枠組みを脱構築していく様子を探り、かつドイツ語圏の女性文学やその他のフェミニズム理論におけるその布置をとらえようとするフェミニズム批評のひとつの試みである。

II. 「言表の主体」の獲得

すでに様々に指摘されている通り、フェミニズム研究はふたつの課題をもつ。すなわち、家父長的文化のパラダイムを脱構築すること、女性のパースペクティヴと経験を再構築することである。したがってフェミニズム研究は、政治的利害において本質的にポスト構造主義的、特に脱構築的批評と関心を共有していると言える⁽¹¹⁾。例えばロラン・バルトは、1967年の「科学から文学へ」において「言語活動をもたない科学という家父長的モデル」⁽¹²⁾（傍点原著者）を告発している。また、父権的なロゴス中心主義とファルス中心主義を同一の体系と見なすジャック・デリダは、1967年までの自らの著作を「ファルス＝ロゴス中心主義の分析のための準備作業」⁽¹³⁾と位置づけ、様々な階層秩序が〈転倒の局面〉⁽¹⁴⁾を通り抜けることの必要性を説いている。フランスでは、リュス・イリガライ、エレヌ・シクスー、モニク・ウィティグといった理論家兼作家達が、ファルス中心主義による抑圧を最も深層のレベルで破壊するための「エクリチュール・フェミニン」と呼ばれる言説を様々に模索している。また精神分析に関わる分野では、サラ・コフマン、ジュリア・クリステヴァといった理論家達によってフロイト理論の「読み直し」及び脱構築が行

われている。

一方旧西ドイツのフェミニズム研究に関して言えば、その特徴はそれが1968年の学生運動から派生し、「妊娠中絶禁止法」(刑法218条)の撤廃要求運動を軸に活性化されていったことにあると言えよう。⁽¹⁵⁾ これまでタブー視されていた性の問題についての討論は、アメリカにおけるコンシャスネス・レイジングと同様の役割を果たしたであろうと推測される。⁽¹⁶⁾ その際、女性監督による映画の数々が運動の要求を公開する媒体となり、女性たちは芸術のプロパガンダ的機能を意識し始めた。そして従来の審美観や文学的規範や市場傾向に依らない、一種のカウンター・カルチャーとしての「書く行為」が始まったのである。⁽¹⁸⁾ 折しも70年代は「新感覚主義」、「新主観主義」の時代、自伝的作品が多く書かれ、文学が個人的経験を指向する時代であった。市場は女性特有の経験に基づいた自伝的要素の強い作品を歓迎したと言っても過言ではなかろう。

ところが、女性作家を苦しめた問題のひとつにやはり「書く主体」としての伝統の非連続性があった。男性のいない理想社会へのアピールとして有名な『去勢』の作者クリスタ・ライニヒは、次のように書いている。「文学は三千年来男達の厳しい生業だった。女性作家はく私」とひとこと書いただけで、それを思い知らされる。そしてそこから突然うまくいかななくなる。⁽¹⁹⁾ 「書く主体」、否、「言表の主体」そのものが、当人の心理的存在を示すものではないからである。それは、「ポスト構造主義批評によれば政治的・文化的なイデオロギーが書きこまれる構造であり、場⁽²⁰⁾であり」、よって「戦略的な立場、個人の願望を受けつけない構造⁽²¹⁾」なのである。それは家父長的文化の価値観によって常にコード化されており、作品の中の〈私〉は従って決して無性ではなく、男性としてのジェンダーを帯びている。女性作家たちは必然的にこの男性的〈私〉を内面化するしかなかったのである。例えばドロステ・ヒュルスホフやリッカルダ・フーフといった作家達が男性のパースペクティブで作品を書いていたことが指摘されている。⁽²²⁾ シクスーも、「政治に興味がない」と言うことが「他人の行う政治に加担する」と言っているに過ぎないように、性を意識しないでものを書く女性は男性の書きものを書いているにすぎないと主張している。⁽²³⁾ よって女性作家が「書かれる客体」としてではなく「言表の主体」として自己規定するためには、パロールとラングの二重のレヴェ

ルでの多大な作業を必要とすことになる。この主体の性差を同定するのでなければ、「父権的秩序のなかでまさしくどちらつかずとなり、男性支配を反映してしまうからである」⁽²⁴⁾。70年代に書かれ始めた多くの女性作家による作品は、語り手と作者の距離の近い、日常的な私的領域に関するものだったことから、それらが「私一的」(ichhaftig)と呼ばれる一方で、女性作家が自分の〈私〉の欠如 (Ichlosigkeit)⁽²⁵⁾ に苦悩するといった状況は、「自伝の時代」とよばれた70年代特有の Prognose だと言えるだろう。

1975年のベストセラーであるヴェレーナ・シュテファンの『脱皮』や、カーリン・シュトゥルックの『階級愛』は、女性作家たちが男性によってつくられた「女性らしさ」の規範、あるいは「書かれる対象」としての自己を内面化することなく、「言表の主体」としての〈私〉を探究していく過程における代表的作品であると言えよう。労働者階級の出身として、また弱者である女性として文学に自己定位を求めるシュトゥルックは、文学と自己との関係が、「文学なんかくだらない」として労働者を理想化するブルジョワ左派の場合と同じではあり得ないことを強く意識しており、自分にとっての文学を「パンと水のように必要なもの」、「労働者の現実を可視化するためのもの」、「自己を招来するためのもの」と規定している⁽²⁷⁾。『階級愛』が文学作品か風俗作品かといったような論争があった一方で、「ここでは少なくとも生をめぐることが書かれている……それに比べていま文学市場に並んでいるものは、汲々とした運指練習のようなものだ」と言われるなど、女性作家の作品は既存の美的価値判断に対する挑戦でもあった。またそれは、作者の性別や社会的出自といった「文学外の」前提にもとづく不穏当な論争を避け、テキストと文脈上の証拠から議論を構築しようとしていた従来の批評に対し、当然イデオロギーの諸前提に対する政治的考察を提起するものともなる。例えばE・A・メーシーは、「芸術っていうのは白人のやること、他の人種はみな『プロパガンディスト』」であるとするある黒人作家の表明を、同じアウトサイダーとしてのフェミニズム批評の枠内で捉え直そうとしており、旧西ドイツにおける女性解放運動のリーダー的存在であるアリス・シュヴァルツァーも、「人種や階級にもまして個人の生活を規定するのは性差で

ある」と主張している。⁽³⁰⁾ シュテファンの『脱皮』は、人種差別よりも根の深い性差別が特に言葉の領域で顕著であることに焦点をあてた。とりわけ性交に関するテクスチュアル・ハラスメントを告発しつつ、既存の意味論的繋がりや語彙によらぬ新しい言葉で自らの性を語ろうとした。その試みは成功したとは言えないが、⁽³¹⁾ 女性が率直に性を語ることに先鞭をつけた点では、エリカ・ジョングの『翔ぶのがこわい』と同様の役割を果たしたと言えるだろう。

ところで、『脱皮』と『階級愛』における〈私〉の探究には共通点がある。「母性」あるいは「自然との深い結びつき」といった言わば生物学的根拠に自分の感性の根源である「女性性」(Feminität)を確認しようとした点である。シュトゥルクは『階級愛』の中で母子のための共同体に対する憧憬を暗示しており、次の作品『母』ではより強く母性主義を打ち出している。また、シュテファンは自己の肉体を語るにあたり、⁽³²⁾ 「温かい、陽の光に満ちたかぼちゃ」といったような自然との連想モチーフを使い、やはり女性だけの共同体を志向している。つまり女性作家にとって、自分のジェンダーを有する「言表の主体」を探究することは、女性解放運動から出発するか否かに係わらず、性差の政治学を問い直すことであり、当然ある種のイデオロギー的帰結に到達することになるのである。そのひとつとして、「女性への一体化願望 = ⁽³³⁾ 女性であることの明確な主張」を経たアマゾン・ユートピア的共同体への志向がある。これは上述の『去勢』において最も顕著であるが、男性の価値観に拠らない女性のそれを重視する分離主義の政治学から強く影響を受けた志向であり、力と支配を伴い女性を統制する政治制度としての「強制的異性愛」⁽³⁴⁾ を批評しつつ、「女性が選びとってきた健全な生活様式」⁽³⁵⁾ としての「女性だけの共同に向かう」ものである。この「女性への一体化願望をもつ」女性達の意識は、一方でアドリエンヌ・リッチを理論家の頂点とするラディカル・フェミニズムおよびレズビアン・フェミニズムへと尖鋭化してゆくが、他方では、西欧近代理性主義文明からの脱出方法として、トニ・モリスンやアリス・ウォーカーなどの黒人女性作家の作品が提唱する〈薬草ヒューマニズム〉⁽³⁶⁾ へと繋がってゆく複雑な位相をみせている。

どちらかという分離主義的傾向をおびている旧西ドイツの女性作家達に比べ、旧東ドイツの作家達は男女共闘型の解放イメージをもっており、性差の問題をより大きな社会的階層秩序の枠内で捉えようとしている。⁽³⁷⁾例えばクリスタ・ヴォルフは、その階層秩序に規定された現実を変革してゆく要素として、「主観の真生さ」(subjektive Authentizität)⁽³⁸⁾をあげている。それは、階層秩序的、家父長的現実には疎外された経験を、「書く」ことによって主観と客観の弁証法的プロセスのなかに置き、疎外の状況を克服していこうとするヴォルフの女性作家としての創作原理である。⁽³⁹⁾

同様に、生物学的性差の根拠によらず、歴史的、社会的に習得されたものとしての女性体験に基づくフェミニズム批評に、ショーウォーターらの提唱するガイノクリティクスがある。⁽⁴⁰⁾ショーウォーターによってガイネーシスと呼ばれるフランスのフェミニズム批評が、⁽⁴¹⁾ファルス＝ロゴス中心主義の外にとどまるあらゆる「他者」の空間のなかで象徴的に女性性を捉え、前衛的なエクリチュール一般の諸性質を解明しようとする傾向をもつものに対し、アメリカのガイノクリティクスはあくまでも体験の権威を主張し、女性性がコード化され、時期尚早にパラメーターを設定されることを拒否しようとする。⁽⁴²⁾それは基本的に歴史的研究を指向し、実際に生じたかたちでの女性の書きものを女性のサブ・カルチャーという文化的な枠組みのなかで理解しようとするものである。この枠組みへの理解がないと、女性文学のテーマと構造を見逃したり、伝統の内部で必要な関連づけをしそこなう可能性があるというのが、⁽⁴³⁾ガイノクリティクスの考えだからである。

以上のように、女性による「言表の主体」の探究とは、様々な文化的背景、様々な理論の磁場のもとでおこなわれる膨大な作業であり、一見分裂ともとれるような多元的な様相を見せている。そこで次に、「主体」の自己規定にいたる進化の段階を遡り、既存のパラダイムが女性性をいかに規定してきたかに関する研究に少し目を向けてみたい。

Ⅲ. 「家なる天使」 ——作られた女性像——

クリスタ・ヴォルフは、「現在は存在していない痛み、未来の、あるい

は過去の痛み⁽⁴⁴⁾に作家自身を置き換えてみる」という意味で「主体となる痛み」(der Schmerz der Subjektwerdung)という言葉を使っている。ガイノクリティクスの陣営に属する批評家サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーは、共著『屋根裏の狂女』のなかで、そのような「痛み」あるいは「書くことへの不安」を女性作家が「先母たち」^{フォア・マザーズ}から代々継承していると主張している。つまり、ミルトン以下の家父長的詩人達によって、詩作のプロセスが、ファリックなペンで処女のページにもものを書く行為、あるいはミュージックとの間の性的な出会いであると比喩的に定義づけられている文学の伝統下では、女性作家が作家としての自己のアイデンティティを体験する状況がどこにもないというのである。またグーバー／ギルバートは、男性の詩人達が家父長的権威を体現しているだけでなく、女性の人格を「清らかな天使」と「破壊的な妖怪」というような極端な類型はめこんでいることを分析し、そのような女性像が女性作家の自意識、主体性、創造力と真正面から衝突するものであると説いている⁽⁴⁵⁾。グリムの「白雪姫」にはじまり、ミルトンの『失楽園』、パトモアの『家庭の中の天使』、ロセッティの「祝福された乙女」など、女性を受動的で創造力を欠いていると定義づける作品は多い。ペンを執り、著作を試みた女性達は皆、押しつけられた劣等感、自信の欠如に感染していた。この絶望と分裂という感染症の「瘴気」は、エミリー・ディキンソンの詩句を借りて「文章の中に蔓延する病い」と名付けられている⁽⁴⁶⁾。女性作家がこの病いを継承するという説は、ハロルド・ブルームによる文学史の構図を応用したものである。ブルームは文学の系譜における文学者間の関係に父と息子のエディプス的闘争をみており、文学史の原動力を、「影響を受けることへの不安」から逃れて自己の立場を「篡奪する力」と定義づけた⁽⁴⁷⁾。グーバー／ギルバートはしかしブルームのこの構図をきわめて家父長的であると非難し、女性が「書くことへの不安」を克服するためには「影響への不安」の定義をさらに定義し直さねばならないとしている⁽⁴⁸⁾。男性にとって「先駆者」から受け継ぐ闘争の規範が、ミュージックの争奪戦という自分のポテンシャルを賭けたものであるのに対し、女性作家は文学に関わる理想の女性像から、「家なる天使」という矮小化されたイメージを受けとる。男性作家が女性に押しつけたもののなかでもっとも有害とされるイメージである。なぜなら、19世紀における天使

のごとき女性は、来世を思い起こさせるだけでなく、実際に死を思わせるものだからである。この世に住まう天使のごとき女性からは、「死に行く者に仕えながら、自らはすでに死んでいるという意味が生ずる⁽⁴⁹⁾」。しかも、天使を称賛する作家達、ダンテ、ミルトン、ゲーテの名の、なんと際立っていることか。グーバー／ギルバートはそれに対し、「瘴気」に冒されながらもペンを執りつづけ、「狂気」と考えられた女性達の系譜、『ジェイン・エア』の中のパーサ・メイスンから、『黄色い壁紙』のシャーロット・パークインス・ギルマンやシルヴィア・プラス、アン・セクストン等へ至る「狂女」達の系譜があることを示唆している。

ドイツにおける「修正＝見直しの^{リヴィジニフナリ}」文学史研究の好例である『作られた女性像』の中でシルヴィア・ボーヴェンシェンは、18世紀初頭の啓蒙主義の時代に作られた平等主義的な「教養ある女性」(die gelehrten Frauen)の像が、家庭経済が重視されてゆくにつれて「感傷的な女性」(die Empfindlichen)⁽⁵⁰⁾へと矮小化されてゆく過程を記述している。それによると、啓蒙主義の思想により宗教と理性が折衷されてゆく過程で、破壊的自然を体現していた〈魔女〉としての女性のイメージは衰退し、女性が理性的存在として認められるようになる。女性も知識を身につけ理性に近づき社会に貢献すべきだ、というわけである。しかしこの「教養ある女性」の像も、いわば合理主義精神の信奉者である男性の合意によって作られた文化教育プログラムの一環にすぎず、必ずしも実体を伴っていたとは言えない。現に理性と関わりのない部分では、廃れたはずの〈魔女〉のイメージ、理性に対する驚異としての女性像がすぐに蘇生されるか、あるいは〈美しき魂⁽⁵¹⁾〉の賞賛など、スコラ哲学的語彙の復活がみられた。そして18世紀後半になって、再生産および教育という社会的義務を果たす場としての〈家庭〉の役割が高まってくると、女性の野心はふたたび疎んじられるようになる。家庭経済は家事労働を無償でひきうける存在を必要とする。啓蒙主義時代の理性主義を補足する意味でも女性の感受性が重視され、家庭内にとどまり外界での疎外を受けず、かつ瞑想的な清らかさを湛えた女性像が作られていった。ボーヴェンシェンによれば、「理想化と馴致」(Idealisierung und Domestikation)は家父長制による女性の無力化の奸策である。〈魔女〉のイメージと違って「感傷的な女性」はもはや何の力も持っていない。〈魔女〉は「敬虔な

る自然の娘」として理想化／矮小化されることにより、自然との宥和をはかりつつそれを手懐けることへの男性の欲求に囚らずも加担することになってしまったのである。⁽⁵²⁾

「文章の中に蔓延する病い」に話を戻そう。女性が男性の作った理想像を内面化してしまうため、〈主体〉と〈客体〉としての二重の「影響への不安」に悩まされることについて述べる時、ヴァージニア・ウルフは上述の「家なる天使」をもちだし、「私が物を書く時いつも私と原稿用紙の間に入りこんできたのは彼女だった」と語っている。また自嘲を込めて次のようにこの天使を描写している。

〔彼女は〕非常に同情心があつかった。限りなくチャーミングだった。全く無私で……毎日自分を犠牲にしていた。鶏肉があれば脚の方をとり、隙間風の入るところがあれば、自分がそこに座った。——つまり、彼女は決して自分の考えや願いをもたず、常に他人の考えや願いに親身になる方がいいというふうのできていた。何よりも——言うに及ばないことだが——彼女は清らかだった。

ウルフが男性の著作を批評しようとする時決まって現れるこの幻影は、女性の受動的、無言者の地位を体現している。女性が誠実に書くためには、自分の考えを持たず男性の規範に従うことを勧めるこの「家なる天使」を追放することの必要性をウルフは認めた。⁽⁵³⁾ところがその彼女も、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』における女性の従属的存在に対する「誠実な」怒りの吐露に対しては手厳しい。

彼女が書く書物は奇形となり、歪んでしまうだろう。冷静に書くべきところで、激しい怒りに駆られて書くだらう。賢明に書くべきところで、愚かに書くだらう。作中人物について書くべきところで自分自身について書くだらう。彼女は自分の運命と闘っているのである。彼女が痙攣を起し、野望半ばにして若い見空で世を去ったのもやむを得ぬことではなかったか？⁽⁵⁴⁾

ここで言われていることは、既存の文学的規範に依存している者にと

って、その制約から離れることがいかに困難であるかを示すひとつの例である。ウルフが「家なる天使」の追放に完全には成功していなかったことはすでに示摘されているが、⁽⁵⁵⁾ 文学的制度や言葉そのものに家父長性のイデオロギーが書き込まれていることに気づくには、やはり女性解放運動以降の作家達を待つしかなかった。

70年代以降の女性作家達による「家なる天使」の追放は、ウルフのそれから遙かに遠のいた感がある。彼女達は男性によって作られた女性像を覆すべく、書くことによって自己のアイデンティティを再検討し、女性としての真正の経験を再構築しようとしている。そのためには上述のごとく多様な試みがある。肉体を再発見する、新たに「女性原理」を求める、テクスチュアル・ハラスメントと闘う、異性愛を脱コード化する等々である。先に紹介したようなドイツにおける女性作家の作品に限って言えば、そこに「主体」「主観」「経験」「真正さ」「アイデンティティ」等の言葉を核とするポジティブな解放イメージが投影されている感がある。が、これから紹介するオーストリアの女性作家、バルバラ・フリッシュムートとエルフリーデ・イエリネク、特にその作品『修道院付属学校』と『愛する女たち』の場合、多少作風を異にしていると言えるだろう。一口で言うなら、これら二つの作品は特定の解放モデルをもたない。登場人物は解放を望む女性の読者達が自己一体化できるような存在ではなく、むしろ「家なる天使」のままにとどまっている。そしてそこから言説のイデオロギーを逆照射することで家父長性の言説を脱構築するのである。次の章では、個々の作品にそってそれを確認してみたい。

IV. 『修道院付属学校』 ——言葉への懐疑——

自伝的作品の増えた70年代以降、ナチス政権下における子供時代を描いた作品が多く書かれたが、その延長として、最近オーストリアでは学校での寄宿舎生活が文学作品のテーマになることが多い。⁽⁵⁶⁾ 1941年オーストリアのアルトアウスゼーに生まれたバルバラ・フリッシュムートの1968年のデビュー作、『修道院付属学校』もその一例である。彼女自身10才から14才までをカトリック系の修道院付属学校で過ごし、⁽⁵⁷⁾ 作品はその時の経験に基づいている。しかし、それがいわゆる普通の「教育小説」⁽⁵⁸⁾

と違うのは、学校内での言説が中心テーマに据えられている点にある⁽⁵⁹⁾。

フリッシュムートはもともと、1959年にグラーツで誕生した芸術家集団「フォルム・シュタットパーク」の創立メンバーであり、ヴォルフガング・パウアーやペーター・ハントケ等と共にそこから派生した作家グループである「グラーツァー・グルッペ」に属していた。このグループはヴィトゲンシュタインの言語哲学から強い影響を受け、——「言葉の限界が私の世界の限界である」という『論理哲学論考』からの一節がモットーのように始終引用されていたという⁽⁶⁰⁾——ジャルゴンの操作や具体詩といった実験的な分野で注目を浴びた。当然フリッシュムートの創作活動も、言葉の「言語ゲーム」的側面に対する関心に裏打ちされている。ヴィトゲンシュタインによれば、言葉を「言語ゲーム」として理解するということは語の道具的機能に注目することである⁽⁶¹⁾。言葉を話すということ、すなわち「命令する、そして、命令にしたがって行為する……乞う、感謝する、ののしる、挨拶する、祈る」といった「一つの活動ないし生活様式の一部」として認識することである。特に『修道院付属学校』においては、「ある言葉を理解するということは、ある技術に通暁すること⁽⁶²⁾。」という『哲学探究』における考えが反映されているように思われる。つまりこの作品が取り組んでいるのは、教育機関を兼ねた教会が言葉によっていかにその権力を伝え、言葉によってそれを行使し、生徒達がいかにその言葉を内面化してゆくかという問題なのである。

作品は14の章から成り立っているが、一貫したストーリーはない。それぞれの章は、祈りや散歩、宗教の授業や生活上の規則といったテーマをほぼ独立に扱っている。特徴的なのは、それがまだ大人の思考能力をもたない子供のパースペクティブから語られていることである。同様に学校側の抑圧をテーマにしても、例えばトーマス・ベルンハルトの『原因』が成人した作者の視点からの回顧だったり、クリスティーネ・ハイデッガーの『窓の外に向かって』のように、主人公がある程度の批判能力をもった“ませた子供”として描かれている場合⁽⁶⁴⁾とは、手法が異なっていると言えるだろう。冒頭には、「真の処女とは、病院で出されるスープのようであるべきだし、そうあらねばならない。スープにあまり目がないように⁽⁶⁵⁾、周りをきよろきよろ見回すべきではない。」というモツ

トーが掲げられている。この修道院における婦女教育の方法を象徴するような時代遅れの要請も、あからさまに批判されるわけではない。フリッシュムートの手法の特徴は、修道院側の言説を一見無批判に再現し、その矛盾の接ぎ目や二重の利害を脱構築的に露呈することにある。例えば第 1 章「祈りと仕事 (Ora et labora)」では、祈りについての規則が復唱される。

私達、カトリックの若き一団に属する者、修道院の教え子、上級および下級クラスの生徒達は毎日喜んで祈る：一日の始まりには朝の祈り、学校の始まりには学校の祈り、授業の終わりには終わりの祈り、食事の前後には食卓の祈り、学業の祈りを始業と終業に、夕べの祈りは夕べに；ミサには週に最低 2 度出る、それは義務でもあるけど私達の望みでもある、そのときは目で、または口で祈る—(KL 7)

また、第 2 章では、昼食後の日課である散歩の規則がこまごまと紹介される。もちろん時々規則は破られる。教師の目を盗んで生徒たちは私語をかわし、雪玉を投げ、つららを拾い、見つかるまでそれをしゃぶる。しかし結局、

私達は規則に従わねばならない。秩序を守らねばならない。礼儀を軽んじてはならない。好むと好まざるにかかわらず、その意志を神に従わせねばならない。神は私達を望んでらっしゃるし、私達も自らの意志でつねに神を望むべきだからだ。(KL 15)

「……すべし」「……せねばならない」という語が象徴しているように、修道院での生活様式は「命令する、そして、命令にしたがって行為する」という言語ゲームによって獲得されてゆく。修道院の権威は何よりも言葉によって担われ、祈りや内省といった生活様式によって強化されていくのである。語り手は一見無邪気に語っているように見えるが、用語は巧妙に並べられている。例えば“sollen”や“wollen”といった助動詞の組み合わせによって、「義務でもあり望みでもある」という要請の矛盾が浮き彫りにされる。しかし語り手自身がその矛盾に気付いているそぶりは

みせない。なにしろ言葉のゲームが要求する感情に、生徒達は通曉してゆくからだ。「私達はお話をしあったり、つついたりする。そして言葉が欲するとうりに笑ったり悲しんだりする」(KL 16) また、忘れてはならないのは作品全体に目につく皮肉と風刺である。用語の巧みな構成(同格の多様など)は、修道院での言説が閉じられたシステム内における一種のジャルゴンに過ぎないことを暗示し、語りの皮肉は、そこでの規則がやはり恣意的なものであることを示唆する。

仲間に加わるか、加わらないか：まるで選べるかのようだ！
いつも二つの可能性があるって言われてる。頭が二つで脚が四対ある牛もいる。右の口に入ったものは左の口へ再び出てくる、そう書いてある。
体を自由に動かすことほど素敵なことはない。戸外で、新鮮な空気のもとで、草原で、森で、自然のなかで。風雨にさらされても、かんかん照りでも。雪がふっても、霜がふっても。(KL 10)

私達の制服は四季にうまく対応している。夏の暑い日には紺のプリーツスカートに白い半袖のブラウスを着る。涼しくなると紺のプリーツスカートに白い長袖のブラウスを着る……(KL 12)

「体を自由に動かすことほど……」これは誰の科白だろうか。生徒達を日課である散歩に連れ出したい修道女の科白か、それとも戸外の空気を吸いたい語り手の気持ちか。この後には適度な運動の必要性がくどくどと宗教の言葉で述べられている。この語り手が皮肉であるというのは、作者が語り手の独白と修道院側の言説とを混合し、はたして誰から出た言葉なのか、語り手がどこまでそれを内面化しているのか、明確にしている点にある。このモンタージュ的技法は、語り手の思考方法が閉じられたシステムとしての修道院内のそれに組み込まれていく様子を示しながら、語り手独自の地口によって、修道院内の言説を異化する効果をもつ。それが「無邪気にして邪悪⁽⁶⁷⁾」な語りと言われる所以である。

修道院で重要視される要素のひとつに「有用性」がある。祈りも散歩も有用性の側面から語られている。「私達は……神様に気に入られるよう

に、自分たちの祈りが有益であるように祈る」(KL 8) 「そして私達は助けが得られるまで祈る。」(KL 9) 散歩のときは二列になって英会話の練習をしながら歩かなければいけない。「時間が無駄に過ぎることのないように。」(KL 12) そしてこれらの行為の有用性は、生徒達個人の「有用性」と密接につながっているのである。授業のなかには、礼儀作法の時間 (die Anstandsstunde) があり、そこでは男女交際の方法が説かれる。まず、話はよりよき異性の友人を得ることから始まるが、そのため例えば時々彼と合い、ジュースや軽食をおごらせるのは「充分許されている (durchaus gestattet)。」そして「彼に本やその他の教養にかかわるものをプレゼントしてもらいなさい。」(KL 35) と、教養重視の姿勢が打ち出される。話がプライベートなことに及び、彼が助言を求めてくるようであれば、上手にそれに応じねばならない。「無私な気持ちで彼を助ける気持ちがあることを分からせれば」彼も感謝するだろうし、その助言に効果があり、彼に必要とされるようになれば、彼も「それをゆるがせにしたりしないで、いつかは尽力してくれる」だろうからだ。「もし与えられた規則を重んじるなら、そのような関係はいかなる人生の場面においても有益」(KL 37) である。

これらの教えは、一見男性との関係を利用するための策を授けているように見えるかもしれないが、女性にとっての「有用性」という言葉が覆い隠している家父長性の利害が次第にあらわになってくる。

もしひとりの男性と近くなり、彼が全身全霊で皆さんを所有したいと望んでいるのであれば (daß er euch mit Leib und Seele in Besitz zu nehmen trachtet), 皆さんの務めは自分の良い面だけを彼に見せることです。(KL 38)

つまり、儉約家であることを見せねばならない。甘いものを勧められても断って甘やかされていないことを見せねばならない。教会の前では十字を切って信心深いことを見せねばならない。彼の母は健康かどうか尋ね、通りすがりの子供をなでて子供好きであることを見せなければならぬ。結婚という段取りになれば、持参金なり支度なりが欠けている場合もあるだろう。しかし、「皆さんにはあらゆる手芸の分野で申し分のな

い教育ができていますので、そのことを補って余りあるくらいです。」(KL 40) と教えられる。

ここで問題になっているのは、結婚市場における女性の市場価値である。フェミニズムの視点から女の交換の問題を問い直す論考「女の市場」⁽⁶⁸⁾の中でイリガライは、「女—商品は自らを有用性と交換価値とに分ける分裂に委ねられている。」(傍点原著者) と主張する。「使用価値」である女が母であるなら、女—処女は「純粋な交換価値」である。それは「使用価値である女とは違って、どこからつかまえたらいいかかわからない」。(傍点原著者) よって女自身が無自覚であるこの価値を高めるためには、教育がなされねばならない。つまりこれぞという男性が結婚の申込みをするまでは、とにかく慎み深くあらねばならない。

皆さんの最初の武器は、彼に見せる魅力をだんだんと高めていくことです。しかし、許容された範囲を決して越えてはいけません。でも不感症ではないかと思われてもいけません。それは彼を不安にします……(KL 38.f)

「この価値は女自体の中には、どんなに探しても見出せない」⁽⁶⁹⁾ので、女の外部にある第三項を必要とする。よって修道院では、女性を「純潔のままに初夜のベッドに伴ってゆく男性だけが、その女性の価値を本当に知っている」(KL 40) と教えられる。そして次には「使用価値」についての教えが続く。

しかしひとたび神聖な婚姻の状態に入れば、夫に仕え、夫に従うという教えを守らねばなりません、(seid ihr zwar dem Gabot unterworfen, eurem Gatten zu dienen und ihm untertänig zu sein) そのとき彼が所有している皆さんの価値がどんなものか、分かっている必要ありません。(doch soll dies im Bewußtsein des Wertes geschehen, den er an euch besitzt.) (KL 40)

ボーヴェンシェンによれば、この「使用価値」は、18世紀の初頭から〈家庭〉が経済共同体としての社会的役割を担うようになるにつれて、

徐々に高まってきたものである。しかも当時は、婚姻関係を結ぶ際の経済的合目的な関心が当然視され、愛情でさえも、理性的モラルと合理的目的性にならなかった場合でなければ芽生えないとまで言われた。その後数十年を経た18世紀半ば頃から、この経済的目的性は「人格の一致」とか「感情の問題」という美辞麗句によって覆い隠されるようになったという⁽⁷⁰⁾。したがってここでも、宗教的モラルの教えであるかのようにして教えられているのは、「女の市場」の法則であり、企業的な家庭のあり方であり、女性としての二重の価値の高め方なのである。しかも「処女教育」の場でも、ぬかりなくプロ・ライフの考えが植えつけられる。

男性がどんな避妊の方法を提案してきても、決して恐れをなくしてはいけません。なぜなら、神からの授かり物は、神が望むとき望む人に授けられるからです。(KL 40)

この論理的矛盾をもものともせず、ひとは結局神を頼ることを教えられる。しかもその力はずねに決まった、家族関係にも敷衍されるべき階層秩序のもとで把握されねばならない。

私達の後ろには母親、教会があり、私達の上には全能の父、神がいらっしゃる。そしてそれらの助けを借りれば、打ち勝つことのできぬものなど何もない。(KL 57)

『修道院付属学校』の主人公は様々に規則を破ったり、級友と恋愛ごっこをしたりして日々を過ごす。修道院の教えにはおおむね従順だった。しかしある日、何かがいつもと違うと思いはじめ、退学処分になった友人の身に自分を置き換えてみたりする。そして彼女に手紙を書く。

……それまでは言い逃れやたわ言をやめさせられたり、文句を言うのを矯正されたりするでしょう。だれもが権威あるものしもべなんです！神から由来しない権威なんてないんですから。だから権威にたてつく人は神の指示にたてつくことになるんですよ！……とか言ってね。／あなたはそんなのもう信じないって言うけど、どうしたらそれがで

きる？あとで来るものが怖くないの？／……良心の呵責を感じたりしない？信じないって言うならどうしてやりたいことを全部やらないの？……また手紙をちょうだい。特に、やりたいことをやってるかどうか書いてね。もしやってないならなぜやらないかも書いてね。私なら絶対やるわ、もしあなたのように自由だったら。(KL 88, 89)

作品は主人公の懐疑の芽生えを暗示しながらここで終わっている。女性解放運動以降の多くの女性作家による作品とは違い、ここには抗議の表明や差別的言語への批判もないし行動する主人公もいない。そもそもストーリーらしきものがないし、主人公が発展的に成長してゆくわけでもない。しかしそれがゆえにこの作品はフェミニズムの戦略上の成功を取めていると言える。つまり修道院で行われている言説がなかば忠実に、なかば風刺的に再現されることによって、宗教的権威が品よくコード化してきた家父長性のイデオロギーが脱神秘化されているのである。この修道院における教育の目的は、「その存在とそれが使う言葉との完全な一致を目指す」⁽⁷¹⁾ことだとも言えよう。しかし、その言葉は「自ら言っていないことを語り」⁽⁷²⁾、「自らの正体を現す」⁽⁷³⁾。例えば、処女なる生徒達は、「へびのように賢く、鳩のように無邪気であるべき」(KL 30)らしいが、これなどはエイドリアン・ミュニックが聖書の文彩に関して言うところのメタレプシス（転移の文彩）の一種であるとも言えよう。ここで行われているのは、男性の支配への脅威と見なされるもの（女性の命名権等の知性）の否定と抑圧である。⁽⁷⁴⁾フリッシュムートの出発点は、そのような文彩をもつ言葉への懐疑であった。だから彼女の懐疑や批判の焦点にあるのは宗教そのものではない。修道院付属学校は、たまたま彼女自身が熟知していたから選ばれたモデルのひとつにすぎない。（それでも彼女は教会のパンフレットや印刷物、教義問答等をすべて読み返したという。⁽⁷⁵⁾）問題の焦点は言葉の持つ強制力、あるいは彼女自身の言葉によると「強制そのもの」である。「それは幼年時代に子供たちの頭の中に埋め込まれる閉じた体系であり、そこから抜け出すことがほとんどできなくなる体系」⁽⁷⁶⁾なのである。

旧西ドイツの女性作家達が〈言表の主体〉を探究する際、どちらかという性政治学に関心の重点が置かれるのに対し、フリッシュムート

の関心は言語の政治学にあると言えよう。もともと「グラーツァー・グループ」の活動は、同じように言葉に対する懐疑を抱く「ヴィーナー・グループ」の作品がどんどん抽象の度を増し、社会への影響力を失ってきたのに対抗して、社会批判、言語批判の度を意識的に強めていったのだが、彼らの信奉するヴィトゲンシュタイン流に言えば、「ものを書く」以前に、言葉を理解することが、権力者の力の表明である言語ゲームと一緒に演じていることになってしまうのだ。フリッシュムートの『修道院付属学校』は、同じ「グラーツァー・グループ」出身のペーター・ハントケ作、『カスパー』とともに、そのことに対する認識を促した問題作であると言えるだろう。

V. 『愛する女たち』 ——主体への懐疑——

バルバラ・フリッシュムートが既に安定した名声を得た作家であるのに対し、1946年生まれのエルフリーデ・イエリネクは、毀誉褒貶の激しい存在である。1975年に第三作『愛する女たち』⁽⁷⁸⁾を発表して以来、「オーストリア女性文学の代表者」と呼ばれてはいるが、女性解放論者たちは最初この作品に拒否反応を示した。⁽⁷⁹⁾

『愛する女たち』が描いているのは、「愛すること」をめぐる女の人生の二つのパターンである。作品は舞台背景であるシュタイアーマルクの美しい景観の描写で始まり、ブリギッテとパウラという二人の主人公の、結婚による社会的上昇を軸に物語が展開する。私生児ブリギッテは下着工場で働らく出来高払いの女工である。結婚以外に未来を見出せない状況にいる。しかも、結婚後労働から解放されるためには、専業主婦の座を可能にしてくれる経済力を持つ男と結婚せねばならない。そして良い例 (das gute Beispiel) である彼女は妊娠することによってライバルを退け、結婚相手として唯一の可能性である電気技師ハインツを手に入れ、望んでいた専業主婦の座を勝ち取る。一方悪い例 (das schlechte Beispiel) であるパウラも、義務教育を終えたばかりだが結婚生活を夢見ている。やはり妊娠やその他の四苦八苦によって (そして16才にして) 目当ての男、林業労働者エーリヒとの結婚にこぎつける。が、より豊かな生活を得るために行った売春行為が発覚して家を追われ、ブリギッ

テがどんな代償を払ってでも逃れようとした下着工場の女工の身分に落ちぶれる。こうして円環を閉じつつ物語は終わる。

一見郷土小説のような始まりと三文小説的ストーリーを持つこの作品が異彩を放っているのは、それが一人称による語り手を持たない最初の女性文学であるためだけではなく、物語の展開が、使い古された（しかもかなり極端な）アフォリズム的言い回しによって語られているからである。例えば、「ブリギッテは今やハインツのためにも身だしなみに気を配る。女ならもうこの道から引き返せない、女なら身だしなみに気をつけなくてはならない。」(LH 9) 「運命を握っているとすればそれは男である。運命を受け入れるとすれば、それは女である。」(LH 6) 等々。「ハインツは何者かであるが、」出来高払いの女工である「ブリギッテは無である……ハインツには未来があるが、ブリギッテには現在すらない。」(LH 12) しかし、結婚も決して幸福を意味しない。そもそも結婚の前提である「愛」ですら、「穴のようなものだった。一度その穴につまづいて転ぶと、ひとは足をひきずりながらも穴を求め続ける。」(LH 91) 結婚に到るや、それは、

女にとっては人生の終わりとお産の始まりである。……女の死との闘いは何年も何年も続く。あまり長く続くので、よく自分の娘の死との闘いにも立ち会えたりする。女たちは自分の娘を憎み始め、自分たちが一度死んでしまったように、なるべく早く娘たちにも死んでもらおうとする。よって、男が現れねばならないのだ。(LH 16)

結婚しない女の将来もまた暗い。「これらの女工はたいてい結婚するけど、しなくてもどのみち落ちぶれる。」(LH 6)

フェミニスト達の神経を逆撫でするようなこれらのアフォリズムは、実はイエリネクの前作である『俺たちあおとりだぜ、ベイビー！』⁽⁸²⁾と『ミヒアエル、幼児性社会のための青少年読本』⁽⁸³⁾におけるマス・メディア批判に通じている。これらの作品が行っているのは、コミックや映画、大衆小説の題材をモンタージュしたり、テレビ番組や流行歌が約束する夢の世界を異化することにより、イメージを商品として消費する資本主義社会を批判することである。イエリネク自身の説明によれば、このよう

な社会は「幼児性社会、つまり未成熟社会であり、超自我を有している。この超自我とはエレクトロニクス・メディアであり、いわゆるフロイト的な意味での社会的父親である。」そしてこのようなメディアの消費者は「エディプス的な葛藤を克服することができない。」なぜなら、夢の世界を見せつけながら消費者との距離を保つというメディアの「誘導構造 (die Führungsstrukturen) 」により、消費者は「この構造を破棄するか、あるいは自分のための政治的な要求をするという考えに決して至ることがない⁽⁸⁴⁾」からである。

『愛する女たち』の主人公たちも「誘導構造」につき動かされて行動する。例えばパウラが学校を終えても家事手伝いをせずに町へ裁縫を習いに行きたいと言いつくのは、映画館、あるいはイタリアへ行くのが夢だからである。「それからちゃんとした男性を探すわ。映画にいつも出てくるのほどでなくてもいいから。」(LH 19) と彼女は言う。しかし語り手によればこのような「よりよい生活」は「いつも決して自分のものではなく、他人のものに過ぎない。」「パウラは四六時中よりよい生活を夢見ている、まるでいつかは自分のものになるみたいに、彼女のためにあるものじゃないのに。」(LH 20) プリギッテの武器はその肉体である。しかし「プリギッテの肉体以外にも市場には沢山の肉体が売りに出されている。この道でのプリギッテの唯一の味方は化粧品業界、アパレル業界である。」(LH 13) 上述の誘導を、日頃使われてきた悲観的アフォリズム、あるいはその辛辣なパロディーに組み込むことにより、夢の世界と消費者との埋めがたい距離が露呈するのである。

前作におけるマス・メディア批判の対象がコミック、映画、テレビ番組等であったのに対し、『愛する女たち』の関心の中心にあるのは恋愛と結婚を美化する郷土小説や三文小説 (Heftchenliteratur) の類、あるいは消費社会において物の商品としての性格を眩ましている広告言語の「誘導構造」であると言えよう。エーリヒは小学校を出るのが精一杯の知力しか持たないので、運転免許が取れずにいるが、スピード狂である。(あるいはそれを夢見ている。)「エーリヒはこの新しい感情がどう役に立つか、テストしたくなった。／ニキ・ラウダだって何度もテストした、しかもかっこいいF-1のマシンを。」(LH 104) エーリヒとパウラは森の中の小屋で性交するが、語り手は読者の期待をあからさまに異化しようと

家父長制を解体する「家なる天使」たち

する。「皆さんの払ったお金では、ここで自然描写まで期待しようたって無理です! この小説は映画じゃないんだから。」(LH 104)「森のことを自然の景観だなんて誰も思っちゃいない。森は仕事場なんだ。郷土小説の中じゃあるまいし!」(LH 105)しかも誘導されているのは主人公ばかりではない。

あちこちのドアの敷居の上には、死にかけた女たちがつぶされたカゲロウのように座り込んでいる。溶けたアスファルトに貼りついたように座り、自分が女王として住まう小さな主婦の帝国をたえず眺めやっている。ある時は食器用洗剤が、またある時は高級料理鍋が彼女たちを女王にする。(LH 68)

この誘導に決定的なのは経済的な要因である。『愛する女たち』が描いているのは、「地方における産業資本主義の経済マトリクスの内部で展開する純粋な生殖の闘い⁽⁸⁵⁾」と言っても決して過言ではなかろう。そこでは「愛でさえ、他のもの全てと同様に苛酷な経済的事実によって決定されている⁽⁸⁶⁾。」

あなたが必要よ、愛してるわ、とブリギッテは言う……愛とは誰かが誰かを必要とする気持ちである。あなたが必要よ、とブリギッテは言う、もう工場に行かなくてもいいように。(LH 22)

パウラは豚がどんぐりを欲しがるように愛を欲しがる。(LH 89)

ブリギッテは酒場通いをしないような男を手に入れるよう気をつけねばならない。きれいな住まいが手に入るよう気をつけねばならない。子供が生まれるよう気をつけねばならない。きれいな家具が手に入るよう気をつけねばならない。そしてもう働かなくてもよくなるよう気をつけねばならない。その前に車のローンが支払済かどうか気をつけねばならない。それから毎年すてきなヴァカンスができるかどうか気をつけねばならない。そして勿論なにかを大目に見ることがないよう、気をつけねばならない。(LH 24)

目当ての男性は、「手に入れられる最良のもの」(LH 12)ではあるが、

彼らの経済状況は主人公たちのそれより少し上であるに過ぎない。それでも結婚は「匿名の搾取を個人的な依存に置き換えるチャンス⁽⁸⁷⁾」なのだ。「ブリギッテはやっと主人を手に入れられてうれしい。長いこと主人なし (herrenlos) でいると、よき主人 (ein gutes Herrchen)⁽⁸⁸⁾ を見つけたことでひとは安心するのである。」(LH 134)

ここでの性愛は官能性ともはや結びついてはいない。それは女性が戦略的に肉体を投入して甘受する暴力として描かれている。

パウラが愛を官能と結び付けているのは、彼女が好む雑誌のせいだ……愛がいくらか仕事と関係しているなんて、だれも言いたがらない。(LH 30)

でも小さな家ならもっと簡単に手に入るはずだ、とパウラは考えた。パウラの肉体はできる限りのことをするだろう。(LH 71)

ブリギッテは性交の際、長い刺のたくさん入った袋が自分の膣のかわりをしてくれたらという想像をして楽しむ。「ハインツはブリギッテが何を面白がっているのか分からないまま、日食か、またはその他の自然災害のように彼女の上に覆い被さる。」(LH 56) 『愛する女たち』における人間関係を省察しているシュタンゲルの言葉を借りれば、特に「交換価値」が意識される関係の場合、「官能に関する対象の独立性は本質的なものではなく、対象に対する官能的な関係も最初から不足しており、その対象を動員できるかどうかの問いに左右されている。」⁽⁸⁹⁾従って実際に登場人物が抱く感情は憎しみや無関心だったりする。「ブリギッテは熱烈にハインツを憎んだ。」(LH 55) 彼女は「彼の白いヴェストについた黒い染みである。」(LH 116) また「パウラの中には決して愛などなかった。何かがあるとしたら、それはどんどん大きくなってゆく憎しみだった。」(LH 105) 「エーリヒは少しどころか、全然人と分かちあう愛をもたない。」(LH 89)

愛という言葉の使用に関しては、イエリネクの手法を「アレゴリーのメトニミー化 (Metonymisierung der Allegorie)」と呼んでいるフォン・ボルマンの説⁽⁹⁰⁾がたいへん示唆に富んでいる。『愛する女たち』ではところどころにアレゴリー的な表現が見られ、そのどれもが極めて非一写実的

である。例えばハインツはハインツという名の〈本当の生活〉(LH 10)であり、エーリヒは〈愛〉そのものである。パウラは「その〈愛〉をすぐに家に招き入れ、上等のカップでコーヒーを出し、ケーキを大きく切ってそれに添える。」(LH 38) ある場面では、〈希望〉や〈将来〉や〈現在〉も登場したりする。(LH 36) 特に人物がアレゴリーとして登場する場合、彼らと彼らが意味する概念との間には、(観念を文字どおりに受け取るアレゴリーのメタファー的解釈と違って)⁽⁹¹⁾有機的な関連がない。現に愛はすぐに義務や憎しみに置き換えられる。(LH 12,36) しかもこの〈愛〉は物との隣接性において語られる。

エーリヒをもう愛せなくなったって、彼が自分のお金で買ったものがまだ沢山ある、それを彼の代わりに愛せばいい。(LH 116)

ヴァルター・ベンヤミンはボードレー論の中で、「千年生きたよりもなお多い思い出 (souvenirs) を、私は持つ⁽⁹²⁾」という『悪の花』の詩句を引用し、「体験の補完物⁽⁹³⁾」である記念品を、「19世紀のアレゴリーの鍵形象⁽⁹⁴⁾」であり、「商品の蒐集対象への変質の雛形である⁽⁹⁵⁾」としているが、愛のアレゴリーであったエーリヒは、記念品、つまりモノのメトニミーと交換可能になる。「アレゴリーのメトニミー化」は、対象と概念、外部と内部の非同一性に注意を促し、消費社会の生活様式においては全てが物象化のなかに取り込まれていることを認識させる。つまり表象とそれが意味するものとの間に類似性の関係はなく、そこにあるのはむしろ制限された知覚や、(メディアによって)条件付けられた経験様式によって刺激される隣接関係なのである。「この種の知覚は独自の感性の説明ではなく、あらかじめ与えられているイメージであり、それによってパウラの経験は導かれる。つまりこの経験は、言わばマルチプル・チョイスの方法⁽⁹⁶⁾で、再認識したものにマーキングするようなものである。」

パウラはいつか、自分のテリトリーではジャングルの中の豹のように見えた男たちのことを読んだことがある。……

だれかにそれができるなら、それはエーリヒだわ、豹だわ。すぐに彼女は週刊誌で豹の載っている箇所をさがす。あったわ！(LH 41)

メトニミー化されたアレゴリーは、従ってベンヤミンのなアレゴリーが行う真理の同一性の解体をさらに押し進めるものだと言えよう。

脱構築とフェミニズム批評の架け橋的存在であるバーバラ・ジョンソンが、ゾラ・ニール・ハーストンの『彼らの眼は神を見ていた』についてやはりメタファーとメトニミーの交差を語っているのは決して偶然ではない。⁽⁹⁷⁾ ジョンソンによれば、メタファーは西欧の伝統において、予期しない真実を明らかにするという特権をつねに担ってきたが、実はメタファー／メトニミーの区別はしばしばたいへん困難であるばかりではなく、「かなりの政治的意味をもちうる」⁽⁹⁸⁾。このように主張しつつ彼女は、ポール・ド・マンの仕事がもつ政治性を読者に想起させる。つまり、メタファーの見せる「真実の断片」が「じつは完全に修辭的な——しかも究極的にはメトニミー的な——手管の産物にほかならないことをあきらかにし、そうすることによって伝統的な階層関係の転倒に成功し、メタファーのもつ誘惑の力とメタファーに与えられる特権とが依拠する土台そのものを脱構築してしまう」⁽⁹⁹⁾作業のことである。さらに彼女は、白人のフェミニストたちが様々なタイプの抑圧を見定めようとしてメタファー／メトニミーの二項対立とパラレルなアナロジーを考案し、それを語る彼女達の言説から、抑圧の最大の犠牲者である黒人女性の存在が抜け落ちてしまっていることを指摘する。一方、ジョンソンが紹介するゾラ・ニール・ハーストンの比喩表現は、メタファーとメトニミーの「交差対句法」であり、内的と思われていたものを外化し、外的と思われていたものを内化するものである。その結果、様々な「像」^{イメージ}がまがいのものであるということが明らかになる。

ジョンソンの主張の中心は、メタファーとメトニミーのいずれかを特権化することに意義を唱え、「真実の声」という概念そのものを再定義することにあるが、それによると『彼らの眼は神を見ていた』の主人公が語りの能力を獲得するのは、彼女がひとつの統一的アイデンティティや自己同一性を抛りどころとせず、内部と外部に引き裂かれて比喩を使うようになるからである。アレゴリー的表現そのものが、「主体による要求の相対化を前提としている」⁽¹⁰⁰⁾ように、『愛する女たち』のイェリネクもまた、語りによる自己同一性の獲得など信じていないように見える。ルド

ルフ・ブルガーによると、イエリネクの作品は、経験する意識や意味の連関が断片化されるという「解体の論理」を具象化したものであり、それは、個人の領域をもはや侵害したりしない、つまりその存在すら許さない社会における小説のありようなのである。⁽¹⁰¹⁾イエリネク自身、現代のシステムにおいては個人主義など幻想にすぎず、個人の自由な発展など不可能であると語っている。よって『愛する女たち』における通俗かつ辛辣なアフォリズムと、⁽¹⁰²⁾(実在したイエリネクの知人がモデルである)⁽¹⁰³⁾ストーリー展開は結局帳尻を合わせてしまう。通俗小説の世界が現実を模倣するのではなく、⁽¹⁰⁴⁾現実が通俗小説を模倣しようとするからである。「アレゴリーのメトニミー化」による彼女の手法は、主人公の「感情」や「体験」(ベンヤミンによれば体験は「死滅した経験の婉曲語法的な表現」⁽¹⁰⁵⁾)である)を語りつつ、それが制限され、条件づけられていることを露呈させ、「主観の真正さ」という概念を徹底的に脱構築することである。それはまた主体神話の脱神話化であるとも言えよう。したがって「ブリギッテは交換可能であり、不必要である。」(LH 12)という節は二重の意味を持つ。主体神話のイデオロギーから逃れるためには登場人物は個別的であってはならず、⁽¹⁰⁶⁾反復可能性をもたねばならない。またその言葉は「人工的」で、⁽¹⁰⁷⁾「意味されるものの空虚な形式」であらねばならない。バルトも言うように、神話に対する最良の武器は「人工的神話をつくりだすこと」⁽¹⁰⁸⁾(傍点原著者)だからである。

イエリネクもフリッシュムート同様に、デビュー当時はヴィーナー／グラーツァー・グルッペの影響下にあり、⁽¹⁰⁹⁾言葉の実験的な使用の段階を経ている。フリッシュムートの『修道院付属学校』における中心的テーマが言葉と権力の結びつきであったのに対し、イエリネクの『愛する女たち』におけるそれは、あらゆるものを商品化し物神化する消費社会の、愛をめぐる神話だと言えよう。しかしイエリネクは、商品化＝脱個人化＝⁽¹¹⁰⁾疎外の図式を批判さえすれば幸福な「夢からの目覚め」に到達できるとは考えていない。彼女の試みは、むしろこの図式を先鋭的に意識することによって「真理の同一性の解体」の行方を見極めようとする、⁽¹¹⁰⁾ショーウォーターの言葉を借りれば、フェミニズム詩学の荒野の極北をゆくことなのである。

VI. まとめ

既に述べたように、ポスト構造主義および脱構築の思想はフェミニズム批評および女性文学に多大な影響を及ぼしているが、その受容の様相は、ドイツとオーストリアとは多少異なっている。ドイツのフェミニズムはどちらかというと二元論的本質主義、あるいは経験主義的傾向を持ち、女性作家の作品は解放イメージの媒体としての性格が強い。よってそこには「ポジティブな役割モデル」がある場合が多い。一方オーストリアの女性作家達は、女性解放のイデオロギーよりもむしろエクリチュールの問題に取り組んでいると言えるだろう⁽¹¹¹⁾。しかも、シクスーやイリガライに代表されるフランスのエクリチュール・フェミニンがまず女性に固有の性現象に着手しているのに対し、オーストリアの女性文学の多くは、女性と言説の関係を対象としている⁽¹¹²⁾。登場人物の多くは解放をめざす女性ではなく、むしろ「作られた女性象」を内面化しようとする「家なる天使」たちである。そして彼女達自身が家父長性のプロットを語ることにより、家父長性の言説が脱構築されてゆくのである。イーグルトン流に言うならば、語り手たちは家父長性の肌理＝本義に沿いながら、また同時にそれに逆らいながら語る。『修道院付属学校』の語り手は宗教的道德を語りながら「女の市場」の原理を、『愛する女たち』の語り手は愛の神話を語りながらいわゆる愛の「アウラの凋落」を語る。それはデリダの言う「善であり父であるものの餌 (éclipse)⁽¹¹³⁾」であるための、つまりこの体系をその不備で隠密な中心において脅かすためのエクリチュールの試みであると言えよう。

『修道院付属学校』と『愛する女たち』に共通しているのは、根源としての主体には遡及しないという姿勢である。『修道院付属学校』において明らかになるのは、デリダのタームを借りていえば、いかなる主体も「既に痕跡の刻印を受けている」ということであり、『愛する女たち』はそれを後期資本主義における消費社会のコンテクストにおいて読み替えている。単純化して言えば、女性がどんなに語ったところで、家父長性に汚染されていない「真正の経験」などあり得ないのである。脱構築的な女性文学およびフェミニズム批評は、このような認識から出発した、フェミニズム研究の第一の課題に関わる自己解体の試みである。ところ

がここにフェミニズム全体に特有の難題が待ちうけている。もともとフェミニズム運動は、女性のパースペクティブと経験を再構築するため、「個人的なことは政治的なことである」という要請をかかげて個人的経験の政治化を図ろうとしたものである。女性文学の試みはそれと表裏一体をなす政治的現実の個人化であるとも言える。よって、家父長性のパラダイムを脱構築するというフェミニズムの試みは、フェミニズムの行う再個人化と脱構築の行う脱個人化との間で言わば宙吊りになっているのである。女性が、女性的なものを家父長性の権威がコード化したものとして自己解体した後にいかにして自己回帰するかという難題は、形而上学の閉域を告発しながらもう一つの形而上学的妄想でしかない「外部」の向かっていかに突き抜けるかという脱構築の難題と通底しているが、フェミニズムがひとつの政治的戦略であるだけに事は深刻なのである。もともと、経験主義的フェミニズム批評も、「個人的・人称性を選択したつもりでも、捨て去ったはずの抽象化＝一般化が回帰する⁽¹¹⁴⁾」という問題につねにさらされてはいるが、脱構築派は、自らが切り崩そうとする体系自体から離れることができないというポストモダン・フェミニズムのディレンマを最も先鋭的に担っていると言えるだろう。

そもそも再個人化と脱個人化の動きがはたして相容れないものなのかという問いが、ジョンソンの指摘するとおりに、「最初から答えを想定している修辭疑問文ではない⁽¹¹⁵⁾」とすれば、アメリカにおけるフェミニズムの最も巧緻な理論家であるアネット・コロドニーが主張するように、広義のフェミニズム運動の現状と一致する批評態度としての多元主義を受け入れるしかないだろう⁽¹¹⁶⁾。もともと、ありとあらゆる物質的、イデオロギー的形態をとってきたファルス＝ロゴス中心主義を批判し得るためには、あらゆるフェミニズム理論が持つ問題に抵抗しなければならない。経験主義は政治的には有効だが、論理的な検証にたえるものではない。エクリチュール・フェミニンは政治的なヴィジョンを提示することができない。脱構築は事態を再び脱政治化する危険性があるし、消費社会におけるフェミニズムは、そのイメージをすでに商品化されてしまっている。「主体の死」という概念も、白人男性の文化的エリート達が個人の名における特権的地位を匿名性のもとに覆い隠す手段であるにすぎないかも

しれないのだ⁽¹¹⁷⁾。そもそも多元主義自体、すべてのなかで最もブルジョワ的な主題になりかねない。が、来るべき批評として革命的であるためには、フェミニズム批評は他のどの批評にもまして、自らの足元からカーペットを抜き取る行為⁽¹¹⁸⁾を敢行し続けねばならないだろう。本論でとりあげた作家達はその後、新たな解放イメージの探究やさらなる自己解体の方向へ向かっているが、それらの試みに関しては、また稿を改めて論じてみたい。

【注】

- (1) Serke, Jürgen: Frauen schreiben. Frankfurt/M. 1982. S.14.
- (2) コロドニー, アネット: 「読み直しの地図」In: 『新フェミニズム批評』(E・ショーウォーター編, 岩波書店, 1990)
- (3) ギルバート, サンドラ・M: 「フェミニズム批評家はなにを望むか」In: 『新フェミニズム批評』
- (4) カラー, ジョナサン: 『ディコンストラクション I』(岩波書店, 1985. S.57.)
- (5) a. a. O. S. 59.
- (6) イーグルトン, テリー: 『文学とは何か』(岩波書店, 1985) S.203.
- (7) 織田元子: 『フェミニズム批評』(勁草書房, 1988) S.156.
- (8) a. a. O. S.161.
- (9) スペンダー, デイル: 『ことばは男が支配する』(勁草書房, 1987) S.viii
- (10) ドイツにおける女性の歴史の非連続性については Bovenschen, Silvia: Die imaginierte Weiblichkeit. Frankfurt/M. 1979. S. 68.を参照
- (11) Weigel, Sigrid: Die Stimme der Medusa. Hamburg. 1989. S. 315.
- (12) バルト, ロラン: 『言語のざわめき』(みすず書房, 1987) S.17.
- (13) カラー, ジョナサン: 『デコンストラクション II』(岩波書店, 1985) S.29f.
- (14) デリダ, ジャック: 『ポジション』(青土社, 1981) S.60f.
- (15) Möhrmann, Renate: Feministische Trends in der deutschen Gegenwartsliteratur. In: Deutsche Gegenwartsliteratur. Hrsg. von Manfred Durzak. Stuttgart. 1981. S. 336.
- (16) コンシャスネス・レイジングについてはスペンダー: a. a. O. S. 222

家父長制を解体する「家なる天使」たち

ff.を参照.

- (17) メーアマン, レナーテ: 「女性たちは新しい活動の場所として映画界を獲得する」 In: 『ドイツ語圏の女性作家』(E・トゥナー他著, 早稲田大学出版部, 1991) S.65ff.
- (18) Weigel: a.a.O. S.42.
- (19) zit. n.: Möhrmann: a. a. O. S. 341.
- (20) (21) ファーマン, ネリー: 「言語の政治学」 In: 『差異のつくり方』 G・グリーン, C・カーン共編, 勁草書房, 1990) S.82.
- (22) Serke: a. a. O. S. 40.
- (23) Cixous, Hélène: Die Unendliche Zirkulation des Begehres. Berlin. 1977. S. 36f.
- (24) ファーマン: a. a. O. S. 83.
- (25) Möhrmann: a. a. O. S. 340.
- (26) Serke: a. a. O. S. 27.
- (27) Struck, Karin: Klassenliebe, Frankfurt/M, 1973. S. 7, 118, 205, 209.
- (28) Möhrmann: a. a. O. S. 342.
- (29) メーシー, エリザベス・A: 『差異のダブルクロス』(彩流社, 1990) S.33.
- (30) Schwarzer, Alice: Der 《kleine Unterschied》 und seine großen Folgen, Frankfurt/M. 1975. S. 178.
- (31) Möhrmann: a. a. O. S. 347.
- (32) Stefan, Verena: Häutungen. München, 1975. S. 7.
- (33) ショーウォーター, エレイン: 「フェミニズム詩学に向けて」 In: 『新フェミニズム批評』 S.146.
- (34) リッチ, アドリエンヌ: 『血, パン, 詩。』(晶文社, 1989) S.53ff.
- (35) ジーマーマン, ボニー: 「かつて存在しなかったもの—レズビアン・フェミニズム文学批評の概観」 In: 『新フェミニズム批評』 S.256.
- (36) 水田宗子: 『フェミニズムの彼方』(講談社, 1991) S.28.
- (37) Serke: a. a. O. S. 21f.
- (38) Stefan, Alexander: Christa Wolf. München. 1987. S. 155ff.
- (39) 中込啓子: 「クリスタ・ヴォルフと「主体となる痛み」あるいは女性の言語の認知」 In: 『世界文学』第69号(世界文学会, 1989) S.25.
- (40) ショーウォーター: a. a. O. S.133ff.
同上: 「荒野のフェミニズム批評」 In: 『新フェミニズム批評』 S.303

- ff.
- (41) 同上：「女の時間，女の空間」In：『よびかわすフェミニズム』（下河辺・篠目編，英潮社新社，1990）S.15f.
 - (42) 同上：「荒野のフェミニズム批評」S.298.
 - (43) 同上：「フェミニズム詩学に向けて」S.137.
 - (44) 中込啓子：a.a.O. S.31.
 - (45) ギルバート／グーバー：『屋根裏の狂女』（朝日出版社，1986）S.69.
 - (46) a.a.O. S. 64f.
 - (47) ブルーム，ハロルド：『アゴーン《逆構築批評》の超克』（晶文社 1986）S.35—75.
 - (48) ギルバート／グーバー：a. a. O. S. 84.
 - (49) a. a. O. S. 35.
 - (50) Bovenschen：a. a. O. S. 80ff. [注] 10を参照.
 - (51) a. a. O. S. 86, 100, 139.
 - (52) a. a. O. S. 242f.
 - (53) 引用はスペンダー：a. a. O. S. 303f.
 - (54) ウルフ，ヴァージニア：『私ひとりの部屋』（松香堂書店，1984）S.120.
 - (55) スペンダー：a. a. O. S. 304.
 - (56) Stangel, Johann：Das annullierte Individuum. Frankfurt/M. S. 255.
 - (57) Frischmuth, Barbara：Klosterschule. Rowohlt Taschenbuch Verlag. 1979. をテキストとして使用。引用はKLと略記して（ ）内に頁数を示す。なお，Klosterschuleの出版年は1968年。
 - (58) Sauter, Josef-Hermann：Interviews mit Barbara Frischmuth, Elfriede Jelinek, Michael Scharang. In：Weimarer Beiträge 27. Jg. 1981. S. 99.
 - (59) Gürtler, Christa：Schreiben Frauen anders? Stuttgart. 1983. S. 121.
 - (60) Schmid-Bortenschlager：Der analytische Blick. In：Frauenliteratur in Österreich von 1945 bis heute. Hrsg. von Carine Klerber und Erika Tunner. Frankfurt/M. S. 111.
 - (61) ヴィトゲンシュタイン，ルードヴィヒ：『哲学探究』（大修館書店，ウィトゲンシュタイン全集 8，1976）11—14節。
 - (62) a. a. O. 23節
 - (63) a. a. O. 119節

家父長制を解体する「家なる天使」たち

- (64) Stangel: a. a. O. S. 269.
- (65) ドイツ語でスープの目とは、表面に浮いた脂肪分のこと。
- (66) Gürtler: a. a. O. S. 129.
- (67) Widmer, Marlies: Mit unschuldiger Miene böse Dinge schreiben. Tagesanzeiger (Zürich), 27. 5. 1968.
- (68) イリガライ, リュース: 「女の市場」In: 『ひとつではない女の性』(勁草書房, 1987) S.223—249.
- (69) a. a. O. S. 230.
- (70) Bovenschen: a. a. O. S. 146.
- (71) Gürtler: a. a. O. S. 128.
- (72) Frischmuth: Zweifel an der Sprache, ORF. Zit. n.: Kindlers Literaturgeschichte der Gegenwart, Die zeitgenössische Literatur Österreichs, S. 269.
- (73) Gürtler: a. a. O. S. 121.
- (74) ミューニック, エイドリエン: 「まがいなきしるし」In: 『差異のつくり方』 S.303.
- (75)(76) Sauter: a. a. O. S. 99.
- (77) Schuckmann, Dietrich: Barbara Frischmuth—österreichische Erzählerin von Rang. In: Weimarer Beiträge 30. Jg. 1984. S. 956.
- (78) Jelinek, Elfride: Die Liebhaberinnen. Rowohlt Taschenbuch Verlag. 1989. をテキストとして使用。引用は LH と略記して()内に頁数を示す。なお, Die Liebhaberinnen の出版年は1975年。
- (79) Sauter: a. a. O. S. 109.
- (80)(81) Weigel: a. a. O. S. 67.
- (82) Jelinek: wir sind lockvogel baby! Hamburg. 1970.
- (83) Jelinek: Michael. Ein Jugendbuch für die Infantilgesellschaft. Hamburg. 1972.
- (84) Sauter: a. a. O. S. 111.
- (85) Burger, Rudolf: Der böse Blick der Elfriede Jelinek. In: Gegen den schönen Schein. Hrsg. von Christa Gürtler. Frankfurt/M. 1990. S. 22.
- (86) Sauter: a. a. O. S. 113.
- (87) Burger: a. a. O. S. 22.
- (88) どちらも普通は犬と飼い主の関係について使われる言葉である。

- (89) Stangel: a. a. O. S. 161.
- (90) (91) von Bormann: Dialektik ohne Trost. Zur Stilform im Roman »Die Liebhaberinnen« In: Gegen den schönen Schein. S. 68.
- (92) Benjamin, Walter: Gesammelte Schriften. Band I. Frankfurt/M. 1974. S. 689.
- (93) a. a. O. S. 681.
- (94) (95) a. a. O. S. 689.
- (96) von Bormann: a. a. O. S. 68, 69.
- (97) ジョンソン, パーバラ: 『差異の世界』(紀伊國屋書店, 1990) S. 274—299.
- (98) a. a. O. S. 278.
- (99) a. a. O. S. 279.
- (100) von Bormann: a. a. O. S. 67.
- (101) Burger: a. a. O. S. 17.
- (102) Sauter: a. a. O. S. 113.
- (103) a. a. O. S. 112.
- (104) Schmid-Bortenschlager: a. a. O. S. 121.
- (105) Benjamin: a. a. O. S. 681.
- (106) Sauter: a. a. O. S. 114.
- (107) バルト: 『神話作用』(現代思潮社, 1967) S. 178.
- (108) a. a. O. S. 177.
- (109) Schmölzer, Hilde: Elfriede Jelinek. In: dies., Frau sein & schreiben. Wien. 1982. S. 87.
- (110) Benjamin: Gesammelte Schriften. Band V. Frankfurt/M. 1982. S. 1006.
- (111) Schmid-Bortenschlager: a. a. O. S. 110.
- (112) Gürtler: a. a. O. S. 82.
- (113) デリダ: 『根源の彼方に—グラマトロジーについて(上)』(現代思潮社, 1967) S. 191.
- (114) ジョンソン: a. a. O. S. 92.
- (115) a. a. O. S. 24.
- (116) コロドニー: 「地雷原を踊り抜ける」 In: 『新フェミニズム批評』 S. 185.
- (117) フォックス=ジェノヴィーズ, エリザベス: 「私自身を書く—アメ

家父長制を解体する「家なる天使」たち

- リカ黒人女性の自伝」In：『よびかわすフェミニズム』S.140.
(118) イーグルトン：『ワルター・ベンヤミン：革命的批評に向けて』（勁草書房，1988）S.203.